
東北大学陸上競技部

OB通信

2013年No. 4 (2013. 8)

- ・ 第63回全国七大学対抗陸上競技大会
兼第24回全国七大学対抗女子陸上競技大会(長居第二陸上競技場)
 - ・ 女子総合2位!!! 優勝校名古屋大学と同点も優勝種目数の差で及ばず…!
 - ・ 男子総合3位!!! 健闘するも連覇ならず…!
 - …男子100mで宮崎幸辰(1)が準優勝の10” 74で大会記録&部記録更新!!
男子200mでも21” 54で優勝&部記録更新!!
 - …男子400mで南共哉(4)が自己ベストとなる48” 25で優勝!!
 - …男子400mHで千葉優人(3)が53” 41で二連覇達成!!
 - …女子走高跳で渡邊朝美(1)が1m50で優勝!!
 - …男子走高跳で山田健太郎(3)が自己ベストとなる1m99で二連覇達成!!
 - …女子4×100mRは3位の50” 60で大幅に部記録を更新!!
 - …男子4×400mRはエース南(4)不在にも関わらず3’ 17” 79で優勝!!
-

- ・ 第63回全国七大学対抗陸上競技大会
兼第24回全国七大学対抗女子陸上競技大会 2～20ページ
- ・ 自己記録更新者一覧 20ページ
- ・ 今後の予定 20ページ
- ・ 編集後記 20ページ

残暑の候、会員の皆様にはますますご発展のほどお喜び申し上げます。

今号では、7月27~28日に大阪の長居第二陸上競技場にて行われました第64回全国七大学陸上競技大会兼第24回全国七大学女子陸上競技大会の結果をお伝え致します。

◎第64回全国七大学陸上競技大会

兼第24回全国七大学女子陸上競技大会(7/27~28) ・長居第二陸上競技場(大阪市)・

大阪の熱い日差しの中、熱戦が繰り広げられました。激闘の末、女子は2位、男子は3位という結果を収めました。今年もたくさんのOB・OGの方々が応援に来てくださいましたことにお礼申し上げます。

・男子総合結果

順位	大学	得点
1位	京都大学	128.5点
2位	大阪大学	82点
3位	東北大学	64.5点 (T : 41.5点(2) F : 23点(4))
4位	北海道大学	53点
5位	東京大学	36点
6位	名古屋大学	21点
7位	九州大学	14点

・女子総合結果

順位	大学	総合得点
1位	名古屋大学	20点
2位	東北大学	20点 (T : 10点(3) F : 10点(1))
3位	京都大学	15点
4位	北海道大学	11点
5位	大阪大学	6点
6位	東京大学	4点
7位	九州大学	3点

～主将挨拶～

私が主将になり初めに掲げた2大目標【七大戦男女総合優勝】、【全日・全女子選突破】。今回の七大戦ではこれまでの一年間のすべてをぶつけようと意気込み戦いました。

結果としまして、男子は総合3位、女子は総合2位という結果に終わりました。男子の反省を考えてみますと、大きく2点上げられると思います。1つ目は、全員の歯車を合わせられなかったことです。大会から始まる前の状況からは、全員が120%の力を出せないと厳しいだろうと感じていました。これを部員たちに一言で伝えようと思ったときに【流れ】という言葉を使っていました。結果とし、僕が危惧していた通り120%の力を出せた部員とそうでない部員の二極化が起こっていました。2つ目はそもそものスタート地点が低すぎたという点です。今回京都大学は圧倒的な実力を持ち、また磐石の態勢をとって挑んできました。スタート地点が低い分、つまり下馬評で圧倒的に負けている地点でこちら側の戦略が狭められてしまいます。勝負事で結果を出す厳しさ、難しさを感じました。

しかし、今回悪いことばかりではありませんでした。まず第一に男子と女子が一緒になって大会に臨めた事。男子は女子の、女子は男子の、つまりひとつの【部】として大会の結果を喜び、悔しがれたこと。これは一年を通しての僕の課題でした。女子は男子とやったほうが絶対いいし男子も女子とやったほうが絶対いい。それを達成できた気がしました。また、人と人のつながりも強く感じました。大きかったのが最後のマイルでした。肉離れをした南にささげる優勝は熱かったです。七大中、このような光景が多く見られました。

最後になりますが、OB・OGの皆様。はるか遠い大阪の地まで足を運んで応援していただきありがとうございました。このように七大を熱い戦いにできたのは皆様のおかげです。本当にありがとうございました。

東北大学陸上競技部 主将 三上和樹

～女子主将挨拶～

こんにちは。元女子主将の中山なつみです。先日行われました七大戦、沢山のOB・OGの方に応援していただきました。どうもありがとうございました。

結果は、女子は一位と同点の総合二位でした。同点の場合、一位の多い方が勝ちとなるのですが、その差で負けました。来年に繋げるためにもこの場をお借りして、七大戦の女子チームについての反省を述べさせていただきます。

まず、優勝にあと一步届かなかった点は何だったのか。私なりの解釈ではありますが、全対抗選手が自分の満足いく結果を出すことが出来なかったからではないかと思います。「自分があと一つ上の順位を取ってれば…」そんな声を何人かの部員から聞きました。全員がベストパフォーマンスをすることはとてつもなく難しいことですが、限りなく100%に近づけることで、来年の優勝が見えてくるのではないかと思います。

また、得点の比率的には、一年生に大きく頼る結果となりました。誤解のないよう申し上げますが、上級生も本当に良く頑張りました。得点もさることながら、それ以上に貢献してもらったと思っています。それでは何が言いたいのかと言いますと、来年は現部員だけでも勝てるくらいの実力を付けてほしいということです。来年もしかしたら強い新入部員が入部するかもしれませんが、その人たちを当てにするのではなく、むしろ $+ \alpha$ になるくらいの実力を付けてほしいのです。そうすれば確実に優勝出来ます。

一方で、今大会が非常に良かったと思える点もありました。それは、皆さんが大会を全力で楽しめていたということです。大会後、同輩は勿論、後輩やOB・OGの方からも「今年の七大戦、とても楽しかったです！」という言葉をお聞きすることが出来ました。OP出場者も対抗の部に出場した人も、マネージャーさんも応援する人も、男女問わず全員が主役だったと思います。一部の人だけではない、皆で闘うことが出来た大会だったのではないのでしょうか。勿論、全員から感想を聞いたわけではないのでまだ分かりませんが、一人でも多くの方が、出来れば全員が心から楽しめた大会であることを願っています。

私にとっての四回目、そして最後の七大戦は本当に楽しく、そして本当に悔しいものでした。全力で戦ったゆえの楽しさ・悔しさだと思います。終わった後だからこそ思うのですが、来年リベンジ出来る機会を持っている後輩たちがとても羨ましいです。けれども、私たち東北大学陸上部女子チームにとって、今年の七大戦は新たなスタート地点になるでしょう。彼女たちなら、きっと出来ます。私はその瞬間を、来年京都の競技場の、今度はスタンドで立ち会えると確信しています。後輩の皆さんには、大会を楽しむことを忘れず、期待をプラスの力に変えて伸び伸びと競技をしてほしい—そう願っています。

最後になりましたが、女子主将になって部全体のことを知るようになり、OB・OGの皆様には本当に多岐にわたってご支援いただいていることを、改めて痛感いたしました。七大戦のみならず、様々な場面で私たちを支えて下さり、本当にありがとうございました。

東北大学陸上競技部 女子主将 中山なつみ



☆トラック

男子 100m 予選

1-7 7着 小林 大地(4) 11"79(-3.4)

小林が出場。4年の意地を見せられるか。スタートの飛び出しは悪くなかったが、前半はほぼ横一列となるレース展開。激しい競り合いに力が入ったのか、後半伸びず、ラストでは他の選手において行かれてしまい、7着でフィニッシュ。アンカーとなる四継での走りに期待したい。

2-5 1着 宮崎 幸辰(1) 11"09 (-1.3) Q

記録に期待のかかる宮崎が出場。スタートから頭一つ抜け出すと、そのまま差を詰

められることなく後半まで集団を引っ張り、ラストは流して余裕の1着で決勝進出を決めた。一年生ながら安定感があり、予選から他大の選手にプレッシャーを与える良い走りであった。

3-8 6着 阿部 耕大(1) 11"51(-1.5)

佐々木(2)の欠場により一年生の阿部が出場。スタートで少し出遅れたが、焦ることなく落ち着いて加速し、最後まで自分の走りを貫いた。うまくまとめられたレース内容だったが、まだまだスピードは戻っていない。今後の成長に期待したい。

男子 100m 決勝

2位 宮崎 幸辰(1) 10"74(-1.2) NGR

決勝では唯一の一年生である宮崎。一年生ながら優勝を飾れるか。スタートの反応は悪くなく、ほぼ横一線となつての走り出し。中盤から宮崎を含む4人が抜け出し、後半は1～3位の激しい競り合いとなる。宮崎はラストまでトップを争い続け、京大の選手とほぼ同時にフィニッシュ。わずかに及ばず0.03秒差で2位となったが、大会新記録となる10"74の大記録を打ち立てた。



▲男子100mで惜しくも2位となった宮崎

女子 100m 予選

1-5 1着 中山 なつみ(4) 12"80(-2.7) Q

二連覇に期待のかかる女子主将中山の出場。苦手なスタートで大きく出遅れてしまうが、中盤で一気に加速してみるみる前との差を詰め、瞬く間に集団から抜け出す。そのままラストまでトップを維持し、余裕の1着で決勝進出を決めた。キレのある走りで決勝に向けて良い流れをつくった。

2-7 5着 千葉 愛里沙(3) 13"56(-2.8)

何とか決勝に食い込みたい千葉の出場。スタートでバランスを崩し出遅れてしまうが、中盤の走りで遅れを取戻し、ほぼ横一線となった3～5位争いに食い込む。しかし、あと一歩及ばず、5着でフィニッシュ。決勝進出はならず悔しいレースとなった。

女子 100m 決勝

3位 中山 なつみ(4) 12"75(-0.9)

自身最後の100mとなる中山。スタートは予選時と同様に大きく出遅れ、他の選手に差をつけられてしまう。中盤うまく持ち直し、本来の伸びのある走りでどんどん前の選手を捉えていくが、トップ集団の逃げ切りが速く、トップを奪い返すまでには至らなかった。それでも1～4位の団子状態の中に食い込んで懸命に競り合い、並んでフィニッシュ。結果は自己ベストの12"75で3位。2～4位まで0.01秒差の激戦であった。



▲女子100mで惜しくも3位の中山(4)

男子 200m 予選

1-2 6着 小林 大地(4) 23"23(-2.2)

100mに続き小林が出場。スタートの反応は良かったが、本来の勢いのある走りが見られず、前半から集団の後方でレースを展開。ホームストレートに入ってからもしまひとつスピードを上げきれず、トップ集団についていけなかった。ラストは5位を争う激しい競り合いとなったが、勝ちきれず6着でのフィニッシュとなった。

2-6 2着 南 共哉(4) 22"29(+0.1) Q

400mの優勝で勢いのにのる南の出場。そのない動作でスムーズなスタートを切ると、前半の100mは軽やかな走りでトップについていく。カーブを過ぎたあたりから前半の走りを活かしてグングン加速し、トップ

の京大選手につける形で2着を守りフィニッシュ。危なげなく決勝進出を決めた。

3-5 1着 宮崎 幸辰(1) 22"39(-4.2) Q

100m同様、優勝候補の宮崎の出場。素早い反応で走り出すと、速いピッチで急加速し、50mを過ぎた地点で既に集団のトップに位置する。そのままスピードを落とすことなく先頭を維持し、ラストでは後ろを振り返る余裕も見せて、堂々の1位でゴール。圧巻の走りで決勝進出を決めた。

男子 200m 決勝

優勝 宮崎 幸辰(1) 21"54(-0.1)

南は直前の四継での肉離れにより棄権せざるを得なくなったため、優勝の望みは宮崎に託された。宮崎は速い反応で勢い良く飛び出すと、前半から他を圧倒する猛加速を見せ、100m地点でトップに立つ。そのまま速いピッチを崩すことなく、ホームストレートでもトップを守って逃げ切りをはかる。ラスト50mで京大の選手に追い上げられるも、見事に振り切って21"54の部記録で優勝を飾った。



▲男子200mでトップに立つ宮崎(1)

男子 400m 予選

1-5 1着 南 共哉(4) 50"16 Q

大本命、南の出場。落ち着いたスタートから最初の100mにかけてアウトレーンの選手との差を一気に詰め、その差を保って

バックストレートは伸びのある大きな走り。そのまま他選手との間合いを測りながらリラックスした走りを貫き、ラスト100mはかなり力を抜いた流した走りで余裕を見せ1着でゴール。危なげなく決勝進出を決めた。

2-3 5着 畑岡 進(3) 51"00

決勝進出に燃える畑岡の出場。勢いよくスタートすると、力強い攻めの走りを見せる。しかし、バックストレートに入るあたりで内側の選手に抜かれると、焦ったのか、いつものスピード感のある加速が出来なかった。200~300mにかけて懸命に前を追うが、思うように差を詰められず、苦しい走りとなる。それでも最後まで諦めず渾身の走りを見せたが、挽回かなわず5着。この悔しさをマイルにぶつけてほしい。

3-4 4着 杉浦 弘樹(3) 50"43

昨年に続き杉浦の出場。スタートで少し出遅れたが、冷静に加速してその差を詰め、アウトレーンの選手との差を一定に保ったままバックストレートはリラックスした走り。200~300mにかけてスピードをあげたが、他選手も譲らず、トップの選手に迫いつくまでには至らない。ホームストレートに入ると、アウトレーンの選手との熾烈な3位争いとなったが、わずか0.02秒差で競り負け、惜しくも決勝進出を逃した。

男子 400m 決勝

優勝 南 共哉(4) 48"25

優勝候補の南に期待がかかる。南はスタートから飛び出し、前半からアウトレーンの選手との差をグングン詰める熱い走りを見せる。200m過ぎで更にペースをあげ、他選手をじわじわと抜き去って、ホームストレートで頭一つ飛びぬけてトップに立つ。ラストまで全く疲れを感じさせないキレのある走りで後走者との差を突き離し、48"25の自己ベストで優勝した。実力以上の力を発揮した素晴らしいレースであった。



▲男子400mで優勝した南(4)

女子 400m 予選

2-6 1着 下島 千歩(4) 61"67 Q

東北大からの出場は下島ただ一人。前半から積極的に走り、バックストレートまでアウトの二選手を楽に追い抜く。そのまま大きな動きで流れに乗ると、200~300mでトップに立ち、ホームストレートへ。ラストは力まず伸び伸びとした走りで後続を突き離し、1着で決勝進出を決めた。競り合う相手もなく、まだ余裕のある走りであり、決勝での好結果が期待できそうだ。

女子 400m 決勝

4位 下島 千歩(4) 61"02

予選から好調な下島。スタートは良い反応で、100mまで他の選手との差を保ち、間合いを見ながら冷静な走り。そこから200mにかけて2人の選手が抜け出し、下島はそれを追いかけて3~5位を競り合う展開となる。ホームストレートに入ると、下島はラストスパートをかけて粘り強い走りを見



▲女子400mで力走する下島(4)

せ、前走者を追い上げて4位でフィニッシュ。表彰台まであと一步であったが、しっかり得点を勝ち取った。

男子110mH 予選

1-7 3着 向出 周太(4) 15"20(+1.4) q

何としても決勝に食い込みたい向出の出場。スタートでやや遅れたが、落ち着いたハードリングを重ねてみるみる他選手との差を詰めていく。いつも以上に滑らかな動きで、無駄のない走りが出来ていた。そのまま後半もスピードに乗り、激しい3位争いとなるが、最後まで気を緩めず走り切り、自己ベストを更新して3着を勝ち取った。プラスに入り決勝進出を決めた。

2-7 6着 本間 大輔(3) 16"87(+1.8)

地道な努力を重ねてきた本間が出場。スタートから一台目までの流れは良かったが、インターバルをうまく刻めず、四台目のハードルで脚を引っかけて大きくバランスを崩す。スピードが出ずにハードルを越えるのが難しく、苦しい走りで6着に終わった。

3-6 4着 工藤 知央(2) 15"26(+2.4)

工藤が400mHと兼ねての出場。スムーズなスタートを切り、きれいなハードリングを見せる。全体的にレベルの高い組で、前半から引っ張られる形となったが、しっかりと自分の走りとりズムを守った。後半もスピードは落ちず、ミスもなかったが、100mの走力差のためかトップ集団には追いつけなかった。15"26の4着でフィニッシュ。風に恵まれたものの、惜しくも決勝進出はならなかった。

男子 110mH 決勝

8位 向出 周太(4) 15"32(-1.3)

予選の自己ベスト更新で勢いづく向出が決勝に臨む。向出は素早いスタートを切り、一台目への入りもスムーズだったが、前半からトップ集団の選手が前に出て差をつけ

られてしまう。それでも予選同様、無駄のないハードリングを重ねていったが、後半はトップに差をつけられ、集団の後方で競り合う形となる。ラストは追い上げてきた選手に競り負け、15”32の8位でゴール。



▲男子110mHで決勝に進んだ向出(4)

男子 400mH 予選

1-5 1着 千葉 優人(3) 55”15 Q

優勝候補である千葉の出場。前半でスピードに乗ると、バックストレートまででトップに立つ。そのままスピードを維持して適度に抑えながらの走り。終始安定したハードリングは乱れなかった。ラストは力を抜き、予選通過を確信しながら余裕のフィニッシュ。問題なく決勝にコマを進めた。

2-4 3着 工藤 知央(2) 55”39 q

調子を上げている工藤が出場。前半から得意のハードリングでグングン加速。300m付近まで二番手につけ、予選通過の位置を守ってレースを進める。ホームストレートに入ると走りに疲れが見え、足が前に進まなくなる。後続に追い上げられるが、ラストのハードルを越えてから渾身のスパートで3位。プラスで拾われ決勝進出を決めた。

3-7 4着 増田 俊太郎(2) 58”69

上位に絡みたい増田の出場。一番アウトで追う選手がいない厳しい状況。それでもスタートから勢いよく飛び出して力のみなざる走りを見せる。バックストレートでインの選手に並ばれるが、焦らずついていった。しかしハードリングの際に体が少し浮

き、ロスが生まれて徐々に差をつけられる。ラストの直線ではトップに離され4番手争いとなるが、意地を見せて競り勝ち4着。

男子 400mH 決勝

優勝 千葉 優人(3) 53”41

二連覇に燃える千葉は、スタートから力強く飛び出すと一台目からトップ。そのまま持ち前の走力とハードリングを遺憾なく発揮し、300mまでは完全に一人旅。ホームストレートに入ると、疲れ始めた千葉を2位の選手がじわじわ追い詰め、ラストのハードルを越えた時点で並ばれる。ラストスパートも互いに譲らず、千葉は身体を投げ出して文字通り渾身のフィニッシュ。熱いレースで同タイムながら見事優勝を飾った。

3位 工藤 知央(2) 54”99

一花咲かせたい工藤は、前半から軽やかな動きでうまく力を抜いた走りを見せる。予選とは違ってしっかりペースを守りつつ、アウトの選手との差をじわじわ詰めていく。堅実で頭脳的な走りを貫き、良い位置につけてホームストレートへ。ラストは激しい3位争いとなったが、底力を見せて競り勝ち、表彰台をもぎ取った。予選からの走り方の切り替えが見事だった。



▲表彰台に乗る千葉(3)と工藤(2)

男子 4×100mR 決勝

3位 42"09 南(4)-宮崎(1)-阿部(1)-小林(4)

表彰台を狙える男子四継。一走南はスムーズなスタートから疲れを感じさせない軽やかな走り、他の選手に差をつける。そのまま絶妙なバトンパスで二走宮崎へ。

宮崎は今大会トップクラスのスピードを存分に発揮し、圧巻の速さで後続との差を引き離しバトンは三走阿部へ。

このバトンパスもうまく決まり、阿部はスピードに乗った良い走りを見せるが、ここで他大の選手が追い上げ、阿部は三番手につけてバトンはアンカー小林へ。

アンカー小林はバトンを受け取ると、100mの無念を晴らすかのような勢いのある走り、北大の猛追を振り切って3位でフィニッシュ。2年連続の表彰台を決めた。



▲ 3位を守り抜いた男子四継メンバー

女子 4×100mR 決勝

3位 50"60

下島(4)-中山(4)-千葉(3)-渡邊(1)

このメンバーで臨む最後のリレーとなる女子四継。2位以上ならば優勝が確定する大事なレースとなった。

一走下島は思い切りの良いスタートで快走し、他大の選手を寄せ付けずバトンは二走中山へ。

このバトンが気持ちよく決まり、中山は気合の入った凄まじい加速を見せる。これまでも増してキレのある見事な速さで、

あっという間に他大の選手を置き去りにすると、そのままバトンは三走千葉へ。

ここのバトンも抜群に決まり、千葉も渾身の走りを見せて他選手に差を詰めさせない。トップを守ったままバトンはアンカー渡邊へ。

ここのバトンもピタリとハマリ、渡邊は懸命にゴールを目指し走り出す。しかし渡邊はフィールド競技フル出場の満身創痕。名大・京大・北大の猛追から必死に逃げるも、ラスト50mで名大と京大に抜かれてしまう。それでも諦めず追いすがり、3位を死守してフィニッシュ。部記録となる50"60で表彰台を勝ち取った。しかし、このリレーの結果で名大に追いつかれ同点となり、惜しくも総合2位となった。



▲部記録で堂々3位の女子四継メンバー

男子 4×400mR

1位 3'17"79

畑岡(3)-岡崎(4)-杉浦(3)-千葉(3)

エース南の肉離れにより、急きょ岡崎が出場することになった男子マイル。この完全に不利な状況で優勝を飾れるか。

一走畑岡は勢いよく飛び出し、前半からグイグイとスピードを上げて攻めの走り。200~300mまでトップにつけるが、ホームストレートでは苦しさも見え、追い上げられる。それでも粘りの走りを見せ、他大の選手と僅差で二走岡崎にバトンをつなぐ。

二走岡崎も前半から快調に飛ばし、100m付近で前の走者をおかわして2位に立つ。

300mまでは軽快な走りを見せたが、ラストはペースダウンして後続に追い上げられ、3位に順位を落としてバトンは三走杉浦へ。

杉浦はバトンをもらおうとグングンスピードを上げ、気迫を感じる走りでバックストレートで2位に立つ。その後もスピードを落とすことなくトップの京大を追い続け、ラストでは3位の名大に迫られるも2位を守り切ってバトンはアンカー千葉へ。

千葉にバトンが渡った時点で、トップ京大との差は50mほど。千葉は前を走る京大を見据えながら、落ち着いた走りですっかりとスピードを上げていく。200m付近までかけて京大との差を若干詰めたが、3位の名大も千葉に追いつく。しかし、200~300mにかけて千葉は圧巻の再加速で名大を振り切ると、ホームストレートのラストスパートで走りを爆発させ、トップの京大をみるみる追い詰めていく。ゴール地点の手前で見事に京大を抜き去り、華麗な逆転劇で優勝を勝ち取った。エースの不在にも屈しない選手層の厚さを見せつけたレースとなった。



▲南に優勝を捧げた男子マイルメンバー

男子 800m 予選

1-2 5着 竹原 大(2) 1'59"73

スピードが持ち味の竹原が出場。スタートでやや出遅れるも、持ち直して100m過ぎで集団に追いつく。先頭走者のハイペースにより徐々に差をつけられるが、懸命に追

いかけ、400mの通過は57秒。400~600mにかけて、苦しそうだが粘りの走りで集団後方につける。しかし、ラストスパートをかけられず、ホームストレートでトップ集団に引き離され5位でフィニッシュ。

2-7 7着 金子 修平(4) 2'13"89

怪我から復帰した金子の出場。四年の意地を見せられるか。序盤は集団後方でレースを展開し、安定した走りで400m通過は57秒。500m過ぎから集団がバラけ始め、金子も遅れ始める。そこから一気にスピードが落ち、後半200mは普段の走りが出来ず、完全に置いていかれて苦しげな様子で7着。実力を発揮できず悔しいレースとなった。

3-6 5着 三上 和樹(4) 1'58"32

決勝進出を狙う三上が出場。落ち着いたスタートを切ると集団やや後方に位置。200m過ぎから先頭のペースが上がっていき、三上は対応が遅れてやや差をつけられる。400mは58秒。その後も1位集団のハイペースについていけず、三上はラスト250mで早めにスパート。そこで差は詰まったものの、追いつくには至らずそのまま5着。



▲男子800mで力走する金子(4)

女子 800m 決勝

3位 宮間 志帆(2) 2'20"28

7位 鈴木 絢子(3) 2'22"26

共に3000mと兼ねて上位が見込める鈴木と宮間が出場。一斉にスタートすると、宮間はハイペースな先頭集団の中程、鈴木は同じ集団の後方につける。そのまま鈴木が

少し順位を上げて、ほぼ宮間と並ぶ形で400mの通過は2人共67秒。その後、先頭の名大の選手を筆頭に集団がバラけ始めると、宮間も鈴木もペースアップし、前の選手を徐々に追い抜いていく。そこから宮間はラスト200mで早めのスパートをかけて抜け出し、激しい3位争いとなるが、見事に競り勝って2'20"28の3位でフィニッシュ。鈴木は宮間のスパートについていけず、団子状態から抜け出せないまま7位となった。



▲女子800mで3位を勝ち取った宮間(2)

男子 1500m 決勝

7位 三上 和樹(4) 3'58"71
 13位 山本 悠平(4) 4'09"61
 15位 朝比奈 祐弥(2) 4'10"54

入賞常連の三上と実力者の山本に加え、ニューフェイス朝比奈が出場。スタートすると、朝比奈が前に飛び出し、前半から積極的に集団を引っ張る。三上は落ち着いたレース運びで、集団の中盤につけて前をうかがう。山本はオーバーペースを恐れてか、集団後方に位置取る。800m過ぎまでレースは大きな動きを見せなかったが、ラスト一周の鐘が鳴ると一気に集団が加速。朝比奈は先頭についていけなくなり、失速してずるずると後退する苦しい展開。後方に位置取っていた山本も、先頭集団との間合いを空けすぎ、対応が遅れてついていけなかった。三上は遅れながらも必死で先頭集団に食らいつき、残り250mで一気にスパートを

かけ、少しでも順位を上げようと前の選手を抜いていく。ラストの追い上げで、得点となる6位の選手まであと一步の所まで迫ったが、わずかに及ばず7位となった。それでも3'58"71の好記録をだし自己ベストを更新した。山本と朝比奈は得点争いには絡めなかったが、最後まで粘ってそれぞれ13位と15位となった。



▲男子1500mで自己ベストの三上(4)

男子 3000mSC 決勝

2位 深渡 慎一郎(4) 9'29"74
 9位 碓井将也(2) 9'57"64

連覇のかかる深渡と、調子を上げている碓井が出場。レース序盤は深渡が集団の2番手につけて様子をうかがい、対照的に碓井は集団の後方につける。二周目に入ると、深渡は先頭に飛び出し、自らハイペースでレースを引っ張る。碓井もじわじわと順位を上げて3番手の集団につけ、中盤では得点圏内を狙える位置につける。一方深渡はトップを守って1000mを2'59"、2000mを6'12"での通過。2000mを越えると、深渡は一気にギアチェンジして後続を突き離しにかかる。しかし、ラスト200mまで来たところで突然動きが止まり、2位の北大の選手に一気に差を詰められて抜き去られ、惜しくも2位でフィニッシュ。ラストは走るのがやっとというような厳しい状況の中でも、気を奮い立たせて走り切る姿には胸が熱くなった。碓井は得点圏内に入ろうと粘った

が、後半徐々に集団がバラけ始めると、順位を落としてラストは北大の選手に競り負け9位となった。



▲男子3000mSCで力走する深渡(4)

女子 3000m 決勝

2位 鈴木 絢子(3) 10'13"19

5位 宮間 志帆(2) 10'22"83

800mに続き鈴木と宮間の出場。スタート直後から、集団はトップの選手と2位集団に分裂した。鈴木は2位集団の先頭、宮間は集団の5番手につけてチャンスを狙う。2位集団は2人を含む6人で形成。1000mの通過は2人共3'24"で、しばらくその状態を保ってレースが進む。2000m付近で鈴木が先頭を譲り、鈴木は後ろについていく形となる。その後すぐに2位集団もバラけ始めるが、鈴木は2位の選手にしっかりついていき、宮間は若干遅れて5番手となる。残り300m地点で鈴木がスパートをかけ、前



▲女子3000mで快走する鈴木(3)と宮間(2)

の選手を軽くかわして2位に浮上し、そのままフィニッシュ。800mの悔しさを晴らした。宮間もスパートをかけて得点圏内である4位を追ったが、あと一步及ばず5位でフィニッシュした。

男子 5000m 決勝

8位 出口 武志(1) 15'27"84

9位 本間 涼介(1) 15'31"12

20位 藤澤 萌人(4) 16'16"71

北大戦と同じく藤澤、出口、本間が出場。スタート直後は3人共集団の中程に位置し、冷静な走りだし。1000mの通過は3人共ほぼ同じ3'00"。しかし、この後の先頭集団のペースアップにより、3人は集団から少し離れて固まって走る。2000mは本間が少し先行して6'00"、藤澤と出口が6'05"。本間はそこからうまく切り替えて徐々に順位を上げ、3000mは9'03"でこの時点で6位につける。出口も懸命に本間についていき、10秒ほど遅れて3000mを通過。しかし、藤澤は大きく遅れ、後方で苦しむ展開に。その後も本間と出口は快走を続け、4000mの通過は12'16"。ラスト一周の鐘が鳴ると、出口が速いスパートで本間を追い抜き15'27"84の8位でフィニッシュ。本間も出口に食らいついて9位となった。藤澤は後半の遅れを取り戻せず、20位と振るわなかった。



▲男子5000mで前を追う藤澤・本間・出口

☆フィールド

男子 走高跳 決勝

優勝 山田 健太郎(3) 1m99

5位 岡部 大輝(3) 1m93

10位 奥 裕之(4) 1m80

連覇のかかる山田、昨年2位の岡部、入賞を狙う奥という3年連続同じメンバーでの出場。

奥はいつもどおり1m80からの挑戦。助走から良い流れで踏み切り、余裕のある跳躍で一発クリア。続く1m85、一本目は良い助走だったが、バーに脚がぶつかった。いつもの悪い癖が出て、脚が残ってしまっている。二本目はバーを越える高さは出ていたが、頂点が合わずにバーを落とした。後がない三本目は、力が入ったのか動きが固くなり、跳びきれず1m80で競技を終えた。

岡部は怪我明けで久しぶりの試合。1m85から挑戦し、一本目で力強い踏み切りを見せ、高さのある跳躍で難なくクリアした。続く1m90は、一本目はスピード感のある助走でしっかり走れていたが、跳びあがる方向が少し低く、バーにぶつかった。二本目は助走から力みが見え、高さが出ずに腰が当たった。三本目は助走を改善し、うまく力を抜いた走りを踏み切りに繋げて見事跳び越えた。三本目で合わせられるあたりはさすがである。続く1m93は、一本目から助走、踏み切りと良い流れだったが、若干身体が流れて脚が当たった。もう少し高さがほしい。しかし続く二本目でうまく修正し、跳躍の頂点をバーに合わせてクリアした。続いての1m96の一本目は、高さは足りていたが、うまくハマらずバーを落とす。もう少し踏み切りでブロックをしっかりするとよい。二本目は、助走スピードを上げて力強く踏み切ったが、身体が流れて突っ込んでしまった。最後の跳躍は、気合が感じられたが、いまひとつ高さを出せずにバーを落とした。結果は1m93で5位となった。

山田は1m90から満を持しての登場。一本目から高さのある跳躍で楽々とクリア。短助走からの踏み切りがとても良く、調子の良さが感じられる。1m93はパスして1m96に挑戦。これもリラックスした良い動きで、高い跳躍を見せて一発クリアし、この時点でトップに立つ。続く1m99は、山田にとって自己ベスト。これも余裕のある跳躍をみせ一発で越えてみせた。助走からの踏み切りの流れが、うまく身体が乗って見事であった。ついに大台2m02への挑戦となる。一本目は助走から力が入り、うまく身体を乗せていけずにぶつかった。少し固くなったか。これが今大会初めての失敗。二本目は助走を抑えた丁寧な跳躍を見せたが、惜しくも身体がかすってクリアならず。後がない三本目は、助走は良かったが踏み切りのタイミングが合わず、あと一步のところまでクリアはならなかった。それでも自己ベストの1m99で二連覇を果たした。



▲男子走高跳で二連覇の山田(3)

女子 走高跳 決勝

優勝 渡邊 朝美(1) 1m50

4位 下島 千歩(4) 1m45

優勝候補渡邊と、専門外ながら得点を狙える下島が出場。

下島は1m30から挑戦し、問題なく軽やかに成功。続く1m35も余裕のある跳躍で一発クリア。北大戦の時よりも跳躍が改善され

ている。この時点で残った選手は4人で、得点は確実となる。続く1m40は助走スピードに負けて身体が少し流れ、背中がバーにぶつかった。しかし、二本目で改善し、力強い踏み切りでしっかり高さを出して跳び越えた。続く1m45は下島の自己ベストタイ記録。北大戦では越えられなかった高さ。その一本目は、助走から踏み切りへと良い流れだったが、高さが足りず腰がバーに当たった。しかし、二本目でガッツを見せ、助走スピードを活かしてしっかりと上方向へ踏み切って見事クリア。続く1m50は下島にとって未知の高さ。一本目は高さが足りず、腰が当たった。高さに萎縮している。二本目も一本目同様、クリアするだけの高さが出ない。三本目は勢いがあり思い切りのいい跳躍だったが、バーに身体が当たって落としてしまった。試技数の差で4位となったが、しっかり得点を勝ち取った。

渡邊は念を入れて1m35から挑戦。流れてはいるが、まだまだ余裕のある跳躍で一発クリア。続く1m40も、高さのある跳躍で難なく飛び越えて見せた。助走のスピードもうまくあげられている。続く1m45は、一本目は助走スピードに対してうまくブロックできず、身体が流れてバーにぶつかってしまった。二本目でうまく改善し、助走のスピードを抑えることでしっかり身体を乗せて高さを出し、余裕のある跳躍でクリアした。続く1m50の一本目はこれまでで一番良い跳躍で、華麗に飛び越えて1位につける。まだまだ記録は伸ばせそうだ。しかし、1m55への挑戦で風が強くなってきて、一本目、二本目ともに助走がかみ合わなくなり、身体が流れてバーを落としてしまう。後がない三本目は、軽快な助走からしっかりと踏み切って高さのある跳躍を見せたが、わずかにバーに触れて運悪く落としてしまった。とても惜しい跳躍だったが、1m50の記録を残して堂々の優勝を飾った。



▲女子走高跳で優勝した渡邊(1)

男子 棒高跳 決勝

2位 高橋 拓実(1) 4m60

14位 工藤 航平(1) 3m20

NM 佐藤 裕貴(4)

優勝を狙える高橋と昨年入賞の佐藤、一年生の工藤の3人が出場。

工藤は3mからの挑戦。一本目はうまく頂点が合わずバーを落とす。二本目も助走から良い流れを作れず失敗するも、三本目でうまく調整して高さのある跳躍でクリア。この跳躍ではまだ余裕があった。続く3m20は思い切りのいい助走でうまく身体を上げていった。身体がわずかにバーにかすり、マット着地後にバーを落とすが、成功と判断され一発クリア。続く3m40、一本目は力が入ったのか高さを出せず、もろにバーにぶつかる。二本目も改善できずに失敗。三本目はこれまでで一番高さがあったが、惜しくもバーを落とす。しかし、入部後初の公式記録を残した。

佐藤は怪我明けで二ヶ月ぶりの実戦。不安も残るが3m80からの挑戦。一本目、助走はしっかり走れていたが、身体を持ち上げるときにバーにぶつかり失敗。二本目は本来の佐藤らしい高さのある跳躍だったが、惜しくもバーと接触した。後がない三本目は、勢いが感じられたが助走が合わず踏み切ることができなかった。怪我に苦しんで記録を残せず、悔しい結果となった。

高橋は4m30からの挑戦。一本目で難なくクリアした。まだまだ余裕がありそうだ。4m40はパスして、4m50もしっかりと跳び越え、バーが跳躍後に風で落ちるが成功と判断される。続く4m60は高橋の自己ベストタイ記録だが、これも一発で成功、まだ余裕があった。この時点で北大の選手との一騎討ちとなる。4m70の一本目は力強い助走でスピードがあったが、跳躍が流れてしまい失敗。二本目は越えるだけの高さはあったが、上からバーに当たって失敗。北大の選手は二本目で4m70を成功したため、高橋は4m70の三本目をパスして4m80に勝負をかけた。ラストチャンスで4m80、身体はうまく上がったが頂点が合わず、上からバーにあたってしまい失敗。惜しくも北大の選手に敗れ、4m60の2位となった。



▲男子棒高跳で2位を勝ち取った高橋(1)

男子 走幅跳 決勝

- 5位 岡崎 和貴(4) 7m06(+0.0)
 17位 平野 いさむ(3) 6m31(-1.1)
 20位 増村 巧(4) 5m98(+3.4)

優勝を狙う岡崎と、四年生の増村、今年から入部した平野の3人が出場。

増村の一本目はスピード感のある助走から力強く踏み切ったが、空中で少し前のめりになってしまった。記録は5m75。続く二本目は踏み切りがピタリと合い、跳躍も乱れず記録を5m95に伸ばした。決勝に進出するためには、もう少し助走スピードのテン

ポアップがほしい。三本目は、追い風の影響もあってかスピードが出ており、勢いのある思い切った跳躍だった、記録もいちばん良く、5m98。決勝には進めなかったが、伸び伸びした良い跳躍を見せた。

平野の一本目は怪我の影響もあってか助走スピードが出ず、いまひとつ勢いが出ない。記録は5m83。踏み切りのインパクトはあるので助走の改善に期待したい。続く二本目は一本目とは助走スピードがまるで違い、思い切った跳躍。向かい風がもったいなかったが、記録を大きく伸ばして6m31。続く三本目も、追い風に乗って助走スピードを活かしたビッグジャンプだったが、わずかにファールでもったいなかった。決勝には進めず悔しさが残った。

岡崎は一本目から助走スピードがあり、踏み切りでもリード足の速さとキープが出来ていたが、惜しくも3cmほどファール。続く二本目は助走から踏み切りまで丁寧に着実にうまくまとめ、記録を残しにいった感じであったが、7m06の好記録で決勝進出を確実にした。続く三本目は、向かい風のため上手く助走を刻めず、途中で跳躍をやめてしまった。記録は6m79。決勝となつての四本目は、これまでで一番助走スピードが出ており、テンポアップから踏み切りまでの流れもとても良かった。しかし、10cmほどファールとなりもったいなかった。五本目は向かい風が強く、対抗するためか助走に力みが見え、跳躍に岡崎本来の伸びがなかった。記録は7m04で惜しくも記録更新ならず。この時点で4位であり、勝負の行方は最終跳躍に託された。6本目は、手拍子に合わせてスピードもテンポアップも段違いの気合の入った跳躍だったが、残念ながらほんのわずかにファール。距離はかなり出ていただけに悔しい跳躍となった。結果、最後の跳躍で逆転を許し、5位で競技を終えた。

女子 走幅跳 決勝

3位 渡邊 朝美(1) 5m18(+2.8)

4位 中山 なつみ(4) 5m18(+1.0)

実力者中山と大型新人渡邊が出場。2人とも表彰台の可能性が十分ある。

中山の一本目は思い切りが良かったが、つま先がやや出てフェール。スピードはかなり乗っていた。二本目も助走は良かったが、踏切板15cm程手前で踏み切った。記録は4m92。三本目で足を調整したが、惜しくも5cm程フェール。最初の三歩がやや不安定で、助走が乱れ気味か。足が合わずに苦しんだが、4位で決勝に。決勝となつての四本目も俊足を活かしたスピード感ある助走だったが、最後の数歩のテンポアップが甘かった。記録を伸ばし5m00。五本目は足がぴったり合った。助走の完成度も高く、伸びのある跳躍で5m18と大幅に伸ばした。更に上げたい最終跳躍。軽快な助走から力強く踏み切りビックジャンプを見せるも、惜しくもフェール。挽回叶わず4位。

渡邊は一本目からきれいにまとめた。スピードも出ているが、スタートの時にセットした足がずれてしまうのが気になる。記録は4m99。二本目は踏み切りはぎりぎり。跳躍は伸びがあり、うまく身体が使えている。順調に記録を伸ばし5m10。まだまだ好記録が期待できそう。三本目は追い風が幸いし、良い助走であった。5m18でシーズンベスト。しっかり踏み切れれば5m30は越えられそうである。2位で決勝に。四本目も追い風に乗ってスマートな跳躍を見せた。記録は5m10で、コンスタントに5m台と非常に安定している。五本目は一歩目のズレが影響してか、足が合わずフェール。この回に逆転され3位に。順位を決める大事な最終跳躍。力のこもった大きな跳躍だったが、惜しくも足が出てフェール。2位は奪還できなかったが、渡邊は全てのフィールド種目で表彰台を決め、存在感を見せた。



▲最終跳躍で手拍子を促す中山(4)

男子 三段跳 決勝

4位 岡崎 和貴(4) 14m39(+0.8)

7位 須藤 海(1) 14m22(-1.8)

10位 田中 悠貴(4) 13m74(+0.7)

昨年3位の田中に加え、今季14m台を記録している須藤と調子を上げている岡崎が出場。3人とも得点を狙える実力をもつ。

田中の一本目はステップまで良い流れだったが、15cmほどフェール。ジャンプでつぶれないよう気を付けたい。二本目は踏み切りで詰まるが、跳躍の内容は良く、うまくまとめた。記録は13m74。三本目も助走スピードはあったが、やはりジャンプでつぶれ記録を伸ばせず13m48。あと一歩で決勝進出はならず、悔やまれる結果となった。

須藤の一本目は審判の白旗に気付かず、時間超過で跳躍できず。二本目は助走が冴えず、跳躍にもキレがなかった。記録は13m29。決勝がかかった三本目、記録を残すため踏み切りを合わせにいったが、全体的にしっかりまとめて大ジャンプ。風に恵まれなかったが1m近く記録を伸ばし、見事決勝にコマを進めた。四本目は助走スピードがあまり出ず、わずかにフェール。五本目は助走の流れは良かったが、踏み切り手前で刻みすぎてステップでバランスを崩した。最終跳躍は助走・踏み切りともうまく身体が乗って良い流れだったが、跳躍の際に身体が浮き、記録は伸びず13m81。惜しくも得点ならず7位。

岡崎は一本目から思い切りの良い跳躍。助走スピードがあり、14m30付近まで跳んだが、わずかにフェール。二本目は、一本目の踏み切りをしっかりと修正し、ダイナミックな跳躍で14m39をマーク。決勝進出を決定づけた。三本目も助走からしっかり走れていたが、ステップでバランスを崩してわずかに乱れた。それでも記録は14m29と距離が出せている。しかし、岡崎は急遽マイルに出場することになり、後の試技はパスせざるを得なかった。表彰台圏内だっただけに残念だが、4位に食い込んだ。



▲男子三段跳で助走に入る岡崎(4)

男子 砲丸投 決勝

13位 酒井 利晃(3) 9m73

15位 佐藤 雄也(1) 9m47

16位 箕輪 純尚(1) 9m28

北大戦と同じ酒井と佐藤に加え、一年生の箕輪の3人が出場。

酒井は一投目から大きな動作で投げたが、うまく力を伝えられず9m48。二投目は、最後まで砲丸をしっかりと押し出すことができ、10m付近まで記録を伸ばして9m73。三投目は記録を意識して気合が入ったが、下半身をうまく使えず若干動きがブレてしまった。9m42と振るわず決勝進出を逃した。

佐藤の一投目は、動作に勢いがなく、砲丸も抜けた感じで8m71といまひとつ。二投目はうまく調整し、グライドの勢いを利用して力強い投擲で9m47と記録を大幅に伸ばした。続く三投目はグライドのバランスが崩れ、距離を伸ばせず9m05。

箕輪は一投目から力強い押しを見せ、9m28と9m台に乗せてきた。しかし、二投目は一投目のように踏ん張れず、砲丸にうまく力が伝わらなかった。8m24と記録を落とす。最終投擲は、グライドの流れが一番良かったが、もう少し砲丸の押し出しにパワーがほしかった。8m73と、一投目の記録を越せずに競技終了。

女子 砲丸投 決勝

3位 渡邊 朝美(1) 8m75

5位 青木 千景(1) 8m39

共に得点圏内を狙える一年生ペア、渡邊と青木が出場。

渡邊の一投目は、グライドからの流れと勢いは良かったが、砲丸の軌道が若干低く、もう少し高さがほしい。それでも8m75の好記録で2位につける。二投目は、右足を引ききれずバランスを崩し7m56。三投目は動きがぎこちなかったが、砲丸を突き出すスピードは勢いがあり、7m83。2位を守って決勝進出。四投目は全体的に力強く、気合の感じられる投擲だったが、止まれずに前に出てしまいフェール。五投目は、首から砲丸が離れるのが速く手投げになり、7m80と伸ばせない。最終投擲は、グライドの途中で足が付き、バランスを崩しフェール。最後の投擲で僅か3cmで逆転され3位。

青木の一投目はグライドの勢いがあまりなく、動きの小ささが気になる。記録は7m95。二投目は、一投目よりも突き出しが大きく力がこもり、8m05と8m台に乗せてきた。三投目は更に良い投擲。徐々に身体も動き改善が見られる。記録も8m39と順調に伸ばして4位で決勝へ。四投目はグライドが止まってしまい7m83と落ち込んだ。上体が少し高いようだ。五投目は砲丸の投げは高さがあった良かったが、勢いが足りずもったいない。記録は8m30と持ち直した。最終投擲は力を込めたが、うまくかみ合わず砲丸を押し出せなかった。記録は7m83。

最終投擲まで得点圏内4位を守っていたが、逆転されて無念の5位となった。



▲渾身の投げをみせる渡邊(1)

男子 円盤投 決勝

3位 石川 遼(3) 35m43

7位 山崎 大志(4) 31m64

18位 佐藤 雄也(1) 17m32

表彰台を狙える石川と山崎に一年生の佐藤を加えた3人の出場。

佐藤の一投目は動作が乱れ、円盤もふらついたが、ラインぎりぎりに何とか入り14m22。続く二投目も不安定な投擲だったが、17m32と少し記録を伸ばした。三投目はタイミングが合わず、右に大きくそれてファール。いまひとつ結果を出せなかった。

山崎の一投目は、円盤が空中で立ってしまい、伸びが全くなかった。記録は26m95。二投目は、円盤にうまく力が加わり、勢いよく飛ばした。31m24で自己ベストを更新した。三投目も力投を見せたが、少し軌道が低く、29m94と記録を伸ばせなかった。しかし5位で決勝進出を決めた。四投目、バランス良くうまくまとめたが、もう一息ほしい。記録は30m88。五投目は気持ちが入ったのか、突っ込みすぎた。30m74と距離は出ている。最後の投擲は、大きいターンから力いっぱい振りぬけ、ダイナミックな今日一番の投擲。31m64と更に自己ベストを更新し、7位で競技を終えた。

石川は一投目からベスト8を見据える渾身の投げ。うまくハマって35m43の好記録

をマーク。続く二投目は上体が先行して顔もそれてしまい、納得のいかない投擲となった。記録は33m70。三投目はリズム良くまとめて、円盤もうまく追い風に乗って34m49。トップで決勝へ進んだ。四投目は勢いはあったが、軌道が低く、思いのほか記録が伸びなかった。ここで3位に転落。五投目は円盤にしっかり力が伝わらず、円盤がブレて33m32。最終投擲はブロックを改善して高さを出すことができたが、34m66と惜しくも記録更新ならず。終始安定した投擲で3位を守って表彰台を決めた。



▲男子円盤投で3位となった石川(3)

男子 ハンマー投 決勝

7位 酒井 利晃(3) 33m92

9位 石川 遼(3) 30m63

12位 山崎 大志(4) 25m42

昨年からのメンバーは一新したが、下積みを重ねてきた山崎、石川、酒井の3人が得点を狙う。

山崎の一投目は、勢い余ってバランスを崩しファール。続く二投目もハンマーをうまく上に引っ張れず、軌道が低いままそれていきファール。何とか記録は残したいところ。三投目はうまく修正し、安定した回転から、高い軌道を意識した力強い投げを見せた。記録は25m42で決勝進出ならずも、最終投擲で粘って四年生の意地を感じた。

石川の一投目はダイナミックなターンからの勢いある投擲で、30mを超えて30m63。二投目は、ターンの一回転目からバランス

を崩し、ファール。この時点で9位。決勝を賭けた三投目はスムーズな回転運動からの大きな投げだったが、思うように伸びず、30m23で惜しくも決勝進出を逃した。

酒井の一投目は速い回転運動から高さのある投擲、32m93で決勝ラインに食い込む。二投目は回転するごとに身体が右にずれていき、そのまま投げてファール。三投目は良い流れだったが、ハンマーがサークルにぶつかり、30m89と伸ばせずも決勝進出。四投目は二回転目の右足の着地点が悪く、バランスを崩したが勢いで投げ切った。記録は30m59。五投目は疲れもあって回転スピードがいまひとつだったが、大きな動きで31m98。この時点で7位、何とか得点したい。最終投擲は、丁寧な安定したターンに加えスピードも出て、今日一番の投擲。33m92と伸ばしたが、6位には及ばず7位。



▲今年も色鮮やかな投擲レンジャー

男子 やり投 決勝

6位 伊藤 泰彬(3) 56m78

10位 中道 和輝(4) 51m19

14位 工藤 航平(1) 48m07

昨年3位の伊藤、今年記録を伸ばしている中道、一年生の工藤の3人が出場。

工藤の一投目は助走から勢いに乗り、投げも力強かったが、わずかに足が出てファール。続く二投目は力みが少し見られたが、全体的に流れがよく、やりをうまく風に乗せた。48m07でシーズンベスト。三本目は、

助走はしっかり走れていたが、腕の振りが少し小さく見えた。力が入ったか、やりが下を向いてしまったのもロスとなり、記録は伸ばせず45m22で決勝には進めなかった。

中道の一投目は助走スピードが出ていたが、止まり切れずにファール。二投目も助走のスピードは良かったが、うまく投げに繋げられず、やりは伸びずに44m35。三回目は勢いのある助走を活かし、力一杯振り切る渾身の投げ。やりはグングン伸びて51m19。自己ベストを大幅に更新する力投。あと一步で決勝進出を逃したが、最終学年の底力を見せた。

伊藤の一投目は助走の勢い余ってファール。二投目で調整し、助走スピードを考えてうまくまとめた投擲。やりの軌道も程よい高さで決勝ラインの54m05をマーク。三投目も全体的にまとまっていたが、51m88と記録は伸ばせなかった。決勝に進んでの四投目は、助走スピードが上がらないままの投げでキレはなかったが54m33と僅かに記録を伸ばした。五投目は助走の最後がドタバタして雑になったが、力強くやりを放って55m33と更に伸ばし6位に浮上、得点圏内に入る。最終投擲は、これまでより緊張感があり気合が感じられた。伊藤らしい伸び伸びとした大きな投げとなり、やりは気持ちよく飛んでいった。記録を伸ばして56m78をマークしたが、5位には及ばず。それでも不調の中で見事得点をもぎ取った。



▲チームを引っ張ってくれた四年生

◎応援に来てくださった先輩方(敬省略)

佐藤健二(S52)、遠藤久則(S55)、古澤元一(S55)、眞山隆徳(S56)、村橋光臣(S58)、齋藤茂(S63)、木場今日子(H元)、綿井傑(H4)、綿井靖子(H4)、沖田章子(H4)、中村大(H4)、安井誠一郎(H4)、石黒一彦(H6)、中野光治(H9)、吉田真人(H9)、吉川雄朗(H14)、畑山峻(H18)、小平圭一(H18)、鈴木義教(H19)、野崎莉代(H19)、青柳光裕(H20)、八木洋光(H20)、小林和也(H20)、川口亮平(H20)、岡本聖司(H21)、加藤聡(H21)、田中祐志(H21)、齋藤純(H21)、藤澤鐘吾(H21)、伊勢只義(H21)、中野一誠(H21)、今泉卓真(H22)、白井孝明(H22)、柴田智弘(H22)、望月明人(H22)、新田和樹(H22)、阿部佑亮(H23)、岩崎辰哉(H23)、新沼啓(H23)、鈴木貴幸(H23)、本間亮太(H23)、一ノ倉聖(H23)、工藤佑馬(H24)、高林佑輔(H24)、鈴木一輝(H24)、杉本和志(H24)、荒木学(H25)、伊藤亮輔(H25)、及川まりや(H25)、大野良輔(H25)、尾形翔平(H25)、菅野均(H25)、木村慎太郎(H25)、石代剛之(H25)、小高真衣(H25)、渋谷知暉(H25)、高田健伍(H25)、田桑陽子(H25)、田附遼太(H25)、辻川優佑(H25)、長谷川遼平(H25)、畠山真二(H25)、房内まどか(H25)、森部峻介(H25)、安井令(H25)、八柳暁(H25)、柳澤邦彦(H25)

今年も多くOB・OGの方々が応援に来て下さいましたが、全員のお名前を把握しきれず、お名前を掲載出来なかった方がいらっしゃいましたら申し訳ございません。また、応援だけでなく齋藤茂さん、中野光治さん、森部峻介さんには氷等たくさんの差し入れをいただきました。その他にもH25年卒の先輩方を中心にたくさんの飲み物や氷をいただき、多くの部員が助けられました。たくさんの応援、本当にありがとうございました。

◎自己記録更新者一覧(記録はいずれも七大戦)

- | | | | |
|----------|-----------------|----------|------------------|
| ・男子100m | 向出 周太(4) 11"37 | ・男子1500m | 三上 和樹(4) 3'58"71 |
| ・女子100m | 中山 なつみ(4) 12"75 | ・男子走幅跳 | 佐藤 文哉(1) 6m12 |
| ・男子400m | 南 共哉(4) 48"25 | ・男子走高跳 | 山田 健太郎(3) 1m99 |
| | 辻川 優佑(M1) 52"95 | ・男子砲丸投 | 山崎 大志(4) 31m64 |
| ・男子110mH | 向出 周太(4) 15"20 | ・男子やり投 | 中道 和輝(4) 51m19 |

◎今後の予定

- | | | |
|-----------|----------------|----------------|
| ・9月6~8日 | 全日本インカレ | …国立競技場(東京) |
| ・9月16日 | 全日・全女駅伝東北地区予選会 | …仙台大学 |
| ・9月21~22日 | 東北総体 | …岩手県営運動公園(盛岡市) |

◎編集後記

今年の七大戦では、女子は優勝校と同点の2位、男子は3位という、とても悔しい結果になりました。しかし三年生以下には、この無念を晴らす機会がまだ残されています。今年の四年生は、特にも後輩たちから慕われる素晴らしい先輩方ばかりで、引退してしまうのは本当に寂しいですが、そんな先輩方に来年優勝する姿を見てもらえるよう努力していきたいと思います。今後とも、ご支援、ご声援のほど、どうぞよろしくお願い致します。

文責 副務 千葉愛里沙

東北大学陸上競技部三秀会

〒980-0815 仙台市青葉区花壇2-1

東北大学評定河原グラウンド内

hukumu_tohoku_ob2sin@yahoo.co.jp